

令和5年度病虫害発生予報第3号の発表について

このことについて、次のとおり発表したのを送付します。

《予報の概要》

作物名	病虫害名	予想発生量	作物名	病虫害名	予想発生量
水 稲	葉いもち	並	ブドウ	べと病	並
	ヒメトビウンカ	やや多		チャノコカクモンハマキ	やや多
	縞葉枯病	やや多	果樹の共通害虫	カメムシ類	少
	イネミズゾウムシ	やや少			
カンキツ	そうか病	並	青ネギ	疫病	並
	黒点病	並		さび病	やや多
	ヤノネカイガラムシ	並		べと病	やや多
	ミカンハダニ	並		軟腐病	やや少
	アブラムシ類	並		アザミウマ類（特にネギアザミウマ）	やや多
	ミカンサビダニ	並		ネギハモグリバエ	やや少
モ モ	せん孔細菌病	並	イチゴ（育苗床）	炭疽病	並
	果実腐敗性病害（灰星病、ホモプシス腐敗病等）	並		うどんこ病	やや多
	褐さび病	やや多		アブラムシ類	やや多
	モモハモグリガ	やや少		ハダニ類	やや少
	ナシヒメシンクイ	やや多	アスパラガス	アザミウマ類（特にネギアザミウマ）	並
	モモノゴマダラノメイガ	並		アブラムシ類	やや多
カ キ	炭疽病	並		ハダニ類	並
	うどんこ病	やや多	露地キク	白さび病	やや多
	落葉病	並			
	カキノヘタムシガ	並			
	フジコナカイガラムシ	やや多			

太文字の病虫害：向こう1か月の間、発生状況に特に注意を要する病虫害を示す。

* 予報根拠中の記号

- (+)：発生量を多くする要因
- (-)：発生量を少なくする要因
- (±)：発生量が平年並になる要因

令和5年度 病害虫発生予報 第3号 (6月)

A. 水稲の病害虫

1. 葉いもち

予 想 発生量 : 並

根 拠 (1) 5月下旬の早短期栽培での発生は平年と同様に認めなかった。(±)
(2) B L A S T A M (いもち病発生予察システム)による5月の感染好適日の出現頻度は多かったものの、6月の気象は降水量が平年並の予報である。
(±)

対 策 (1) いもち病対象の育苗箱施薬を行っていない圃場では、今後の気象条件に注意して、本田での薬剤防除を6月下旬から7月上旬に行う。
(2) 補植用の置き苗は発生源となるので、補植終了後に速やかに処分する。

2. ヒメトビウンカと縞葉枯病

予 想 発生量 : **ヒメトビウンカ : やや多**
縞葉枯病 : やや多

根 拠 (1) 5月中旬の小麦上でのヒメトビウンカの発生量は平年並であった。(±)
(2) 5月下旬の早短期水稲でのヒメトビウンカの発生量はやや多かった。
(+)
(3) 近年、ヒメトビウンカの保毒虫率及び縞葉枯病の発生が多い傾向にある。
(+)

対 策 (1) ウンカ類対象の育苗箱施薬を必ず行う。
(2) 育苗箱施薬を行っていない圃場や縞葉枯病の多い地域では、本田初期にヒメトビウンカ対象に薬剤防除を行う。なお、早期栽培での防除適期は6月上中旬、短期栽培と普通期栽培での防除適期は7月上中旬である。
(3) 本田初期の発病株は二次伝染を引き起こすため、抜き取って処分する。

3. イネミズゾウムシ

予 想 発生量 : やや少

根 拠 5月下旬の早短期栽培において、食痕の認められる株の発生量は少なく
(-)、生息成虫の発生は認めなかった (-)。

対 策 (1) 株当たり寄生成虫密度が0.3~0.5頭(育苗箱施薬を行っている場合は0.5頭以上)に達している圃場は、水面施用剤で追加防除を行う。
(2) 根が健全に育つようにできるだけ浅水管理し、成虫の葉の食害が多い圃場では早めに中干しを行うことで幼虫の被害が軽減できる。

B. 果樹の病害虫

—カンキツ—

1. そうか病

予 想 発生量 : 並

根 拠 (1) 一般圃場での5月下旬の発生量は平年と同様に認めなかった。(±)
(2) 6月の気象は降水量が平年並の予報である。(±)

対 策 (1) 幼果期に防除する。
(2) 樹勢を健全に保ち、防風対策を行う。

2. 黒点病

予 想 発生量 : 並

根 拠 (1) 一般圃場での5月下旬の発生は平年と同様に認めなかった。(±)

(2) 6月の気象は降水量が平年並の予報である。(±)

対 策 (1) 伝染源である枯枝を除去し、6月中旬～7月中旬に薬剤防除を徹底する。

(2) 梅雨期には固着性の高い展着剤を加用する。

3. ヤノネカイガラムシ (第1世代)

予 想 発生量 : 並

根 拠 一般圃場での5月下旬の発生は平年と同様に認めなかった。(±)

対 策 (1) 1～2齢幼虫期に防除する。

(2) 発生圃場では、かけむらのないように薬剤防除を実施する。

4. ミカンハダニ

予 想 発生量 : 並

根 拠 (1) 一般圃場での5月下旬の発生量は平年並であった。(±)

(2) 6月の気象は気温が平年並(±)、降水量が平年並(±)の予報である。

対 策 (1) 100葉調査で、1葉当たりの寄生雌成虫数が0.5～1頭になれば防除する。

(2) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

5. アブラムシ類

予 想 発生量 : 並

根 拠 (1) 一般圃場での5月下旬の発生量は平年並であった。(±)

(2) 6月の気象は気温が平年並(±)、降水量が平年並(±)の予報である。

対 策 発生を認めたら早めに薬剤防除を実施する。

6. ミカンサビダニ

予 想 発生量 : 並

根 拠 (1) 県予察圃場での前年秋期の発生量は少なかった。(－)

(2) 一般圃場での前年秋期の発生量は平年並であった。(±)

(3) 6月の気象は気温が平年並(±)、降水量が平年並(±)の予報である。

対 策 前年発生の多かった圃場では6月中～下旬に薬剤防除を実施する。

ーモ モー

1. せん孔細菌病

予 想 発生量 : 並

根 拠 (1) 県予察圃場での5月下旬の発生量は平年並であった。(±)

(2) 一般圃場での5月下旬の発生量は平年並であった。(±)

(3) 6月の気象は降水量が平年並の予報である。(±)

対 策 (1) 薬剤防除を実施していない園では早急に防除する。

(2) 例年多発する園地では果実への感染を防止するため、早めに袋かけを行う。

(3) 発病枝は伝染源となるので、見つけ次第除去して適正に処分する。

(4) 病原菌は葉や果実の自然の開口部(気孔、水孔等)や傷口から侵入するので、風当たりの強い園地では防風ネット等の防風対策を施すとともに、コスカシバ、キクイムシ、モモハモグリガ等の害虫防除を徹底し樹勢低下を防止する。

2. 果実腐敗性病害（灰星病、ホモプシス腐敗病等）

- 予 想 発生量 : 並
- 根 拠 (1) 一般圃場での5月下旬の発生は平年と同様に認めなかった。(±)
(2) 6月の気象は降水量が平年並の予報である。(±)
- 対 策 (1) 発病枝及び発病果を除去する。
(2) 収穫20日前から5～7日間隔で、果実に十分付着するように薬剤防除を実施する。
(3) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

3. 褐さび病

- 予 想 発生量 : **やや多**
- 根 拠 (1) 県予察圃場での5月下旬の発生量は多かった。(＋)
(2) 一般圃場での5月下旬の発生は平年と同様に認めなかった。(±)
(3) 6月の気象は降水量が平年並の予報である。(±)
- 対 策 枝の病斑が最大の伝染源であるので、見つけ次第発病葉とともに切り取り適正に処分する。

4. モモハモグリガ

- 予 想 発生量 : やや少
- 根 拠 (1) 県予察圃場での5月下旬の発生は平年と同様に認めなかった。(±)
(2) 一般圃場での5月下旬の発生は平年と同様に認めなかった。(±)
(3) 県予察圃場フェロモントラップでの5月下旬の第1世代成虫の誘殺は認めなかった。(－)
- 対 策 成虫発生最盛期からふ化直後に薬剤防除を実施する。

5. ナシヒメシンクイ

- 予 想 発生量 : **やや多**
- 根 拠 (1) 県予察圃場での5月下旬の芯折れはやや多かった。(＋)
(2) 一般圃場での5月下旬の発生量は平年並であった。(±)
(3) 県予察圃場フェロモントラップでの5月の誘殺数はやや多であった。(＋)
- 対 策 (1) 早めに袋かけを行い、無袋栽培では10日間隔で薬剤防除を実施する。
(2) 芯折れは枝の中から幼虫が脱出しないうちに剪除する。
(3) 樹上及び地面に落果した被害果は処分する。

6. モモノゴマダラノメイガ

- 予 想 発生量 : 並
- 根 拠 県予察圃場予察灯の5月の誘殺数は平年並であった。(±)
- 対 策 (1) 早めに袋かけを行い、無袋栽培では10日間隔で薬剤防除を実施する。
(2) 樹上及び地面に落果した被害果は処分する。

ーカ キー

1. 炭疽病

- 予 想 発生量 : 並
- 根 拠 (1) 一般圃場での5月下旬の発生は平年と同様に認めなかった。(±)
(2) 6月の気象は気温が平年並(±)、降水量が平年並(±)の予報である。
- 対 策 (1) 発病枝は見つけ次第除去し、処分する。
(2) 6月中～下旬に薬剤防除を実施する。薬剤防除はかけむらのないように散布する。

2. うどんこ病

- 予 想 発生量 : **やや多**
- 根 拠 (1) 県予察圃場での5月下旬の発生量は多かった。(+)
(2) 一般圃場での5月下旬の発生量は平年並であった。(±)
(3) 6月の気象は降水量が平年並の予報である。(±)
- 対 策 薬剤防除は、発病初期に、葉裏に付着するように散布する。

3. 落葉病

- 予 想 発生量 : 並
- 根 拠 (1) 前年秋期の落葉病の発生量は平年並であった。(±)
(2) 6月の気象は降水量が平年並の予報である。(±)
- 対 策 (1) 樹勢を健全に維持する。
(2) 6月～7月上旬に2～3回防除する。薬剤防除は葉裏にも十分付着するように散布する。

4. カキノヘタムシガ

- 予 想 発生時期 : やや遅い
発生量 : 並
- 根 拠 (1) 県予察圃場での越冬世代成虫の発生量は平年並 (±)、発生時期はやや遅かった。
(2) 一般圃場での5月下旬の被害発生は平年と同様に認めなかった。(±)
- 対 策 (1) 越冬世代成虫最盛期 (5月下旬) の7～10日後の薬剤防除を実施するが、できていない場合は、必ず6月中旬までに実施する。
(2) 防除を実施したにも関わらず、被害が続く場合には追加防除を行う。

5. フジコナカイガラムシ

- 予 想 発生量 : **やや多**
- 根 拠 (1) 一般圃場での5月下旬の発生量は平年並(±)であったが、一部地域で発生が多かった。(+)
(2) 防除員報告では発生の多い地区があった。(+)
- 対 策 幼虫最盛期 (6月第3半旬頃) に薬剤が幼果のがく部に十分付着するように散布する。

ーブドゥー

1. ベと病

- 予 想 発生量 : 並
- 根 拠 (1) 一般圃場での5月下旬の発生は平年と同様に認めなかった。(±)
(2) 6月の気象は降水量が平年並の予報である。(±)
- 対 策 (1) 圃場の排水に努め、敷わらを励行する。
(2) 被害葉は見つけ次第除去し処分する。
(3) 薬剤防除は葉裏に十分付着するように散布する。

2. チャノコカクモンハマキ

- 予 想 発生量 : **やや多**
- 根 拠 (1) 一般圃場での5月下旬の発生は平年と同様に認めなかった。(±)
(2) 県予察圃場フェロモントラップでの越冬世代成虫の誘殺数は多かった。(+)
- 対 策 幼虫発生期 (6月上中旬頃) に防除する。

－果樹の共通害虫－

1. カメムシ類

- 予 想 発生地域： 県下全域、特に山林隣接圃場
発生量： 少
- 根 拠 (1) 坂出市府中町の予察灯の誘殺数は少なかった。(－)
(2) 綾歌郡綾川町の予察灯の誘殺数は少なかった。(－)
- 対 策 (1) 有袋栽培では、できるだけ早く袋かけを行う。
(2) 圃場内をよく観察し、被害果実やカメムシ類の発生が見られる場合は、早急に防除を行う。特にスギ、ヒノキ等が周辺に多い圃場や、過去に被害が認められた圃場では注意する。
(3) 成虫は夕方に飛来し夜間加害するので、薬剤散布は夕方に広域かつ一斉に行うと効果的である。
(4) 黄色蛍光灯は、チャバネアオカメムシには忌避効果があるが、ほかのカメムシには効果がないので注意する。
(5) 防除薬剤は香川県主要農作物病害虫雑草防除指針に従って選定する。ただし、合成ピレスロイド剤を連用するとカイガラムシ類やハダニ類が急激に増加することがあるので注意する。

C. 野菜、花きの病害虫

－青ネギ－

1. 疫病

- 予 想 発生量： 並
- 根 拠 (1) 5月下旬の発生量は平年並であった。(±)
(2) 6月の気象は降水量が平年並の予報である。(±)
- 対 策 (1) 圃場の排水を良くし、水を長期間停滞させないようにする。
(2) 発生の多い圃場では、菌密度が高くなっているため、圃場をかえるか土壌消毒を実施する。
(3) 薬剤防除は予防的に実施し、初期感染を防ぐことによって散布回数を減らすよう努める。

2. さび病

- 予 想 発生量： **やや多**
- 根 拠 (1) 5月下旬の発生量はやや多かった。(＋)
(2) 防除員報告では、発生量のやや多い地区があった。(＋)
(3) 6月の気象は降水量が平年並の予報である。(±)
- 対 策 (1) 窒素質肥料は適切に施用し、草勢を良好に保つ。
(2) 取り残しの発病株が周辺への伝染源になるので、早めに除去し適正に処分する。
(3) 薬剤散布は予防的に実施し、初期感染を防ぐことによって散布回数を減らすよう努める。発生を認めたら治療効果のある薬剤で防除を行う。
(4) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

3. べと病

- 予 想 発生量： **やや多**
- 根 拠 (1) 5月下旬の発生量はやや多かった。(＋)
(2) 6月の気象は気温が平年並(±)、降水量が平年並(±)の予報である。
- 対 策 (1) 発病株は周辺への伝染源になるので速やかに除去し、適正に処分する。
(2) 圃場を見回り、発生を確認した場合は直ちに治療効果のある薬剤を散布する。

- (3) 排水不良は発病を助長するので、圃場の排水を良くする。
- (4) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

4. 軟腐病

予 想 発生量 : やや少

- 根 拠 (1) 5月下旬の発生は認めなかった。(－)
 (2) 6月の気象は気温が平年並(±)、降水量が平年並(±)の予報である。

- 対 策 (1) 窒素質肥料の過不足がないよう肥培管理する。
 (2) 圃場の排水を良くし、水を長期間停滞させないようにする。
 (3) 発生の多い圃場では、菌密度が高くなっているため、圃場をかえるか土壌消毒を実施する。
 (4) 薬剤防除は予防的に7～10日間隔で行う。

5. アザミウマ類(特にネギアザミウマ)

予 想 発生量 : やや多

- 根 拠 (1) 県予察圃場での5月下旬のタマネギにおける発生量はやや少なかった。
 (－)

- (2) 5月下旬の発生量は多かった。(＋)
 (3) 防除員報告では、タマネギ、青ネギで発生量のやや多い地区があった。
 (＋)
 (4) 6月の気象は気温が平年並(±)、降水量が平年並(±)の予報である。

- 対 策 (1) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
 (2) 圃場を良く観察して、葉にわずかなカスリ状の食害痕が見られたら防除する。
 (3) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

6. ネギハモグリバエ

予 想 発生量 : やや少

- 根 拠 (1) 5月下旬の発生量はやや少なかった。(－)
 (2) 6月の気象は気温が平年並(±)、降水量が平年並(±)の予報である。

- 対 策 (1) 防虫ネットを張るなどして、侵入防止対策を講じる。
 (2) 摘葉した残さや、収穫終了後の茎葉は次作の発生源になるので、土中に埋めるか、古ビニール等で被覆するなど、適切に処分する。
 (3) 多発してから防除は困難であるため、産卵痕や食害痕が見え始めたら早めに防除する。
 (4) 定植時には育苗トレイ灌注または粒剤施用をする。

－イチゴ(育苗床)－

1. 炭疽病

予 想 発生量 : 並

- 根 拠 (1) 5月下旬の育苗床での発生は平年と同様に認めなかった。(±)
 (2) 防除員報告では、発生量のやや多い地区があった。(＋)
 (3) 6月の気象は気温が平年並の予報である。(±)

- 対 策 (1) 発病葉やランナーは可能な限り除去するとともに、除去した発病葉、ランナーは伝染源となるので適正に処分する。
 (2) 水滴の飛散等で伝染するので、発病が見られる圃場では、灌水の跳ね返り等がないように注意する。
 (3) ランナーの切り離し前までの防除を徹底し、育苗床で発病を減らすよう努める。

- (4) 薬剤防除は予防的に行い、初期感染を防ぐ。
- (5) Q o I 剤に対して感受性の低い菌株が確認されているので注意する。

2. うどんこ病

- 予 想 発生量 : **やや多**
- 根 拠 (1) 5月下旬の育苗床での発生量はやや少なかったが、一部地域で発生量がやや多かった。(±)
- (2) 防除員報告では、発生量のやや多い地区があった。(＋)
- 対 策 (1) ランナーの切り離し前までの防除を徹底し、苗床で発病を減らすよう努める。
- (2) 本病は葉裏に発生することが多いので、こまめに観察して早期発見し、薬剤は葉裏までかかるよう丁寧に散布する。
- (3) 発生圃場では、7～10日間隔で薬剤防除を行う。曇雨天が続く病気の急増が予想される場合には、防除間隔を短縮する。
- (4) 伝染源を絶つため、収穫を終了した圃場（本圃）の株は直ちに処分するとともに、子苗（ランナー）を切り離した後、親株は早期に除去し処分する。
- (5) 窒素肥料の過多や葉が混み合ったりすると多発しやすくなるので、適切な栽培管理を行う。
- (6) 7～8月の高温期になると白い粉状の分生胞子は見られなくなるが、病原菌はイチゴ苗に残存しているため、本圃へ発病株を持ち込まないように発病葉は可能な限り除去するとともに、育苗床での防除を徹底する。
- (7) 耐性菌の発生を回避するため、同一系統の薬剤を連用しない。散布回数が多くなることから、各薬剤の使用回数及び収穫前日数を遵守する。

3. アブラムシ類

- 予 想 発生量 : **やや多**
- 根 拠 (1) 5月下旬の育苗床での発生量は少なかった（－）。
- (2) 防除員報告では、発生量のやや多い地区があった。(＋)
- (3) 黄色水盤での5月のアブラムシ類の誘殺数は多かった。(＋)
- (4) 6月の気象は気温が平年並の予報である。(±)
- 対 策 (1) 育苗床は防虫ネットで被覆し、アブラムシ類の飛び込みを防止する。
- (2) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
- (3) 抵抗性の発達回避のため、同一系統薬剤を連用しない。
- (4) 今後もある有翅虫の飛来が続く場合もあるので、黄色水盤トラップによる誘殺数等（病害虫防除所ホームページに掲載 <http://www.pref.kagawa.lg.jp/byogaichuboj/index.html>）を参考にし、適期防除に努める。

4. ハダニ類

- 予 想 発生量 : **やや少**
- 根 拠 (1) 5月下旬の育苗床での発生量は少なかった。(－)
- (2) 6月の気象は気温が平年並の予報である。(±)
- 対 策 (1) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
- (2) 親株床での防除を徹底し、育苗床での防除回数を減らすよう努める。
- (3) 育苗床（苗の親株からの切除後）では発生をこまめに観察し、早めに防除を実施する。散布にあたっては、使用回数に留意する。

ーアスパラガスー

1. アザミウマ類（特にネギアザミウマ）

予 想 発生量 : 並

- 根 拠 (1) 一部地域で発生量がやや多かった。(+)
(2) 県予察圃場での5月下旬のタマネギにおける発生量はやや少なかった。
(-)

(3) 6月の気象は気温が平年並(±)、降水量が平年並(±)の予報である。

- 対 策 (1) 施設の開口部を防虫ネットで被覆したり、光反射資材を施設周縁部に敷設するなどして、侵入防止対策を講じる。
(2) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
(3) 圃場内の数か所で成茎の擬葉が繁茂しているところを手で払って、10×20cm程の板上に1か所当たり1～5頭の成虫を認めたら防除する。
(4) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

2. アブラムシ類

予 想 発生量 : **やや多**

- 根 拠 (1) 黄色水盤での5月のアブラムシ類の誘殺数は多かった。(+)
(2) 6月の気象は気温が平年並(±)、降水量が平年並(±)の予報である。

- 対 策 (1) 施設の開口部を防虫ネットで被覆したり、光反射資材を施設周縁部に敷設するなどして、侵入防止対策を講じる。

(2) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。

(3) 抵抗性の発達回避のため、同一系統薬剤を連用しない。

- (4) 今後有翅虫の飛来が続く場合もあるので、黄色水盤トラップによる誘殺数等（病害虫防除所ホームページに掲載

<http://www.pref.kagawa.lg.jp/byogaichuboj/index.html>）を参考にし、適期防除に努める。

3. ハダニ類

予 想 発生量 : 並

- 根 拠 (1) 6月の気象は気温が平年並(±)、降水量が平年並(±)の予報である。

- 対 策 (1) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。

(2) 刈り取った茎葉は圃場から持ち出し、処分する。

(3) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

ー露地キクー

1. 白さび病

予 想 発生量 : **やや多**

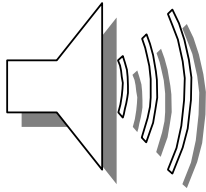
- 根 拠 (1) 5月下旬の発生量はやや多かった。(+)
(2) 6月の気象は降水量が平年並の予報である。(±)

対 策 (1) 薬剤散布は発生初期から5～7日間隔で行う。

(2) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

(3) 採穂前の防除を徹底し、本圃に病気を持ち込まないようにする。

(4) 窒素質肥料の過不足がないように肥培管理をする。



6月～8月は、農薬危害防止運動月間です。

農薬の使用が増える時期ですので、今一度、農薬を適正に使用できているか、チェックしましょう。

農薬はラベルをよく読んで使用しましょう

病虫害防除所インターネットホームページ

URL: <https://www.pref.kagawa.lg.jp/byogaichuboj/index.html>

